

童話 くらべ川はどこから流れてくるの

嶋津治夫

利根川は日本で一番大きな川で、群馬県のみなみ川町の山から流れ出して関東平野を南に流れ、千葉県銚子市で太平洋に注いでいます。

この利根川には大小たくさんある支流が流れ込んでいます。利根川下流の千葉県香取市にある「くらべ川」もその支流のひとつです。この小さな川について、ひとりの女の子がその「源流」（川のはじまり）を調べようと思い立ちました。女の子の名前は「ウメちゃん」小学校の一年生です。

ウメちゃんの両親は、三年くらい前に香取市の小見川というところの山あいの集落に「移住」してきました。お父さんは横木屋さんで、お母さんは農村生活の勉強と仲間と一緒に農村を元気にする熱をやっています。

ウメちゃんの家は里山のもとにある白い家です。春になると山の木々が芽吹いてみずみずしい緑色になります。それから田んぼに水が入って田植えになります。あたり一面うす緑色になります。

一年生になって初めての夏休みになりました。一学期の終業式の日、校庭の大きなヒマワリの花を見ながら、ウメちゃんは「自由研究」に何をしようかと考えました。そうしたら、この前読んだ「川はどこから流れてくるの」という本がとても面白かったので、自分の家の近くの田んぼの中を流れている「くらべ川」がどこから流れてくるのか調べてみようと思い、お母さんに話しました。「ウメ、それはいいね」とお母さんは言いました。

お母さんの車に自転車を乗せて、小見川の町にある「少年自然の家」まで行き、そこからまずはくらべ川の「下流」の方を調べてみようとして行きました。そのあたりのくらべ川は川の幅も三十メートル以上あって、中学生がカヌーの練習をしていました。土手もきれいでサイクリングロードになっていました。

次の日、いよいよくらべ川の「上流」を調べることにしました。

小見川の町外れの「へいせい橋」から上流を目指して走ります。川は田んぼの中を流れています。田んぼのイネはどれもみな穂を出しています。川はさきのうの下流の方に比べて川の幅が狭く、土手も整備されていません。草がたくさんはえています。

さらに上流に向かって走ります。川の幅ももっと狭く

なって、二メートルくらいになりました。田んぼの両側は小高い台地の森があつて、こういう所の田んぼは「谷津田（やつた）」というのだとお母さんが言いました。

もっと進むと「ひかた町」の田んぼに入りました。川幅はもう一メートルくらいになって、イネも穂を出しているのどこに川が流れているのかよくわからないくらいです。ここからは自転車ではなく歩いて行くことにしました。

このあたりは昔「大原幽学」という人が遠くからやってきて、お百姓さん達の生活を良くするために一生けんめい力を尽くしたとお母さんが言いました。また、この人は世界で最初の「農業協同組合」を作った人とされています。お母さんはそういうことも研究しているのです。

そしてとうとうくらべ川の「源流」にやってきました。そこはひかた町の山の中にある「東栄寺」という古いお寺のうら山でした。その山から清水がしみ出してきてお寺の下にある田んぼに流れ込み、それがひかた町の川になってやがて小見川の町に入ります。そこでは川幅も広がって、カヌーの練習場にもなっています。そうしてやがてくらべ川は利根川と合流して、その利根川は銚子の町で太平洋に流れ込んでいたのです。

小さな川も、やがて大きくなって海に流れ込んでいるのです。

何枚かの写真も入れて、題を「くらべ川はどこから流れてくるの」として自由研究をまとめてお母さんに見せると、「ウメ、よくがんばったね」と言われました。

でも、どうしてこの小さな川が「くらべ川」というのでしょうか。ウメちゃんがその事をお母さんに聞くとお母さんは次のように話してくれました。

ウメ、富山県の方に「黒部川」という大きな川があるの知ってるわね。昔、このお寺のお坊さんに、富山の方から来た人がいたの。それで自分のふるさとをなつかしんでこの小さな川を「くらべ川」と言っていたのを、地元の人たちがいつの間にかその名前と呼ぶようになったということなの。

昔から人の行き来があつて「移住」もたくさんあったということよ。ウメちゃんももう少し大きくなったらかかることでしょう。そして、人も川のように、どこかに向かって流れているということよ。

今、ウメちゃんの家の周りの田んぼは、稲刈りの真っ最中です。

（千葉県香取市在住）